

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2022年8月20日号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第8回仙台国際音楽コンクール 【開催日程】ヴァイオリン部門 2022.5.21(土)～6.5(日) ピアノ部門 2022.6.11(土)～2022.6.26(日)

第8回仙台国際音楽コンクール ピアノ部門ファイナル&ガラコンサート レポート

西原 稔(音楽学者)

筆者は第8回仙台国際コンクールのピアノ部門のファイナルを拝聴した。ここでは主に6月23日から25日に行われた6名のファイナリストの演奏を中心に取り上げることにした。

まず驚いたのは水準の高さである。6名とも演奏会の舞台上で活躍しても何の遜色もないほどの完成度をもった演奏で、改めてこのコンクールが、日本が世界に誇る特別なコンクールであることを如実に実感させてくれた。また仙台市と市民の数多くのボランティアに支えられていることは特筆すべきである。連日、会場に詰め掛けた多くの聴衆はファイナリストそれぞれに心からの拍手を送っている姿に感銘を受けた。そして仙台フィルハーモニー管弦楽団の役割の大きさは改めて言うまでもない。この管弦楽団があるからこそ、ファイナルにおいて協奏曲をオーケストラとともに演奏することができるという機会が提供されていることの意義は大きい。

初日は最初にジョンファン・キムがベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第3番」を演奏した。とくに弱音での自然な美しい響きが印象的であった。次のルウオ・ジャチンはモーツァルトの「ピアノ協奏曲 ハ長調」を演奏。柔和な情感溢れる演奏で、彼のクリスタルのような音は美しい。キム・ソンヒョンはベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第5番」をおおらかに奏した。この日最後の太田糸音のプロコフィエフの「ピアノ協奏曲第3番」は、さまざまな音色や情感溢れる表現、卓越した技巧で目を引いた。翌24日は最初にヨナス・アウミラーがベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第3番」を奏した。質感のある音と奥行きのある表現が印象的であった。ジョージ・ハリオノが同じ「ピアノ協奏曲第3番」を奏した。より内省的な表現の第3番で、アウミラーとは対照的な表現であった。ジョンファン・キムはラフマニノフの「ピアノ協奏曲第3番」を非常に大きなスケールで演奏した。内声の細かな表現が見事であった。この日最後のルウオ・ジャチンはプロコフィエフの「ピアノ協奏曲第2番」を多彩な音色で華麗に演奏した。その卓越した技術力は瞠目すべきである。25日はまずキム・ソンヒョンがモーツァルトの「ピアノ協奏曲 二短調」を演奏した。彼のモーツァルトは透明な音が美しく、とくに残響の表現に感銘を受けた。太田糸音の演奏したモーツァルトの「ピアノ協奏曲 ハ短調」は、その香しい音と自然な音楽の流れは印象的で、柔和な表情の一方で深い陰影も描き出していた。ヨナス・アウミラーのブラームスの「ピアノ協奏曲第1番」は、音楽に深みがあるだけでなく、それぞれの音に強い説得力があり、その演奏では卓越した技巧を上回る、すぐれて知的な側面を感じた。最後に登場したジョージ・ハリオノはチャイコフスキーの「ピアノ協奏曲第1番」を演奏した。華のある演奏で、作品の劇的な盛り上げ方は見事である。

どのファイナリストの演奏も申し分のない高度な演奏技術力を持ち、その技術力に裏付けられたそれぞれ個性的な音楽的な表現を聞かせてくれた。6名とも非常に音が美しい。弱音にあっても音はホールの隅々まで通り、強音にあっても音が割れることはなく、十分に打鍵がコントロールされている。古典的なレパートリーと後期ロマン派から近代のレパートリーを課すことで、演奏者の作品への異なったアプローチを聴くことができたのは、さまざまな意味でよかった。

25日の午後7時半から審査結果の発表が行われ、第1位はニュー・イングランド音楽院在学の中国のルウオ・ジャチン、第2位はクリーヴランド音楽院修士課程修了のドイツのヨナス・アウミラー、第3位はベルリン芸術大学大学院在学の日本の太田糸音がそれぞれ入賞した。発表前に行われた審査委員長の野平一郎氏の講評でも、6名の演奏水準の高さを評価していた。翌26日に上位3名の入賞者によるガラ・コンサートが行われ、多くの聴衆の拍手を受けた。この拍手を聞いて、このコンクールが市民に支えられているということを強く実感した。



第8回コンクールの演奏をYouTubeでお楽しみいただけます https://simc.jp/8th_competition/movie/
両部門の予選からファイナル、ガラコンサートのオンデマンド配信を9月30日(金)まで行っています。ぜひご視聴ください。



■お問い合わせ／公益財団法人 仙台市市民文化事業団 仙台国際音楽コンクール事務局
〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5 Tel:022-727-1872 Fax:022-727-1873
E-mail:info@simc.jp URL:https://simc.jp

第8回仙台国際音楽コンクール ピアノ部門ファイナルと入賞者ガラコンサートを聴いて

萩谷 由喜子(音楽評論家)

今回はファイナリスト6名の中にドイツ国籍2名、イギリス国籍1名を見出せたことが、率直に言って新鮮に感じられた。過去3回を聴いたが、これまでファイナルに残った外国人にはアジア系かロシア人、またはアメリカ人が多かったからだ。音楽に国境がないのは大前提ながら、ヨーロッパ諸国からも活発な応募があればコンクールの国際色がより鮮明になり、ファイナルまで何名か残ればさらに意義がある。今回、ヨーロッパ勢3名に日本、韓国、中国各1名という比率となったのは理想的だった。

ファイナリスト6名への感想は「若い！うまい！能弁！」に要約できる。第1位のルウオ・ジャチンが1999年、第2位のヨナス・アウミラーが1998年、第3位の太田糸音と第4位のジョンファン・キムが2000年、第5位のキム・ソンヒョンが2002年、第6位のジョージ・ハリオノが2001年生まれと皆若く、それも20～23歳という比較的狭い幅の年齢分布である。演奏レベルもこれまでから一つ突き抜けた高さにあり、しかも全員が自己のピアニズムをアピールする術に長け、ピアノを通して能弁に語った。まさに、新時代のピアニスト群の出現である。

ルウオ・ジャチンは最も音の美しいピアニストだった。タッチの引き出しが豊富なところにペダリング技術が優れているため、音色のブレンドが絶妙なのである。耳もよいらしく和声の推移や転調に繊細に対応していた。彼のこうした基本技術と能力はまずモーツァルトに遺憾なく発揮された。プロコフィエフの第2番では、ヴィルトゥオーゾの一面をみせ、卓越したリズム処理能力も証明した。ガラコンサートのプロコフィエフは採点の掣肘(せいちゅう)から解放されて、より自由度の高い完全なコンサート・ピースに仕上がっていた。聴きながら書いた筆者のメモには「超絶テクニックの中に音楽の大きな流れを作り出している。テクニックがその流れに奉仕しているに過ぎないところが秀逸」とある。

ヨナス・アウミラーはベートーヴェンの第3番ハ短調を先に聴いたが、音の線の太さに感心したものの、強弱のコントロールが粗削りであったことと、ペダルの踏み替え時に足音が目立つ点が気にかかった。ところが翌日のブラームスの第1番二短調で俄然、前日の印象が払拭された。幅広い表現力と楽器のクリアな音色が最大限に生かされ、ナチュラルでスケールの大きな音楽が構築されたのである。ダブル・オクターヴ+トリルの技術も見事。長丁場のスタミナ配分も申し分なく、この曲が自家薬籠中(じかやくろうちゅう)のレパートリーであることがはっきりと分かった。足の雑音も生じなかった。ガラコンサートでも見事なブラームスを聴かせた。

太田糸音はプロコフィエフの第3番ハ長調から聴いた。タッチはしなやかで弾力があり、出だしの深い海のような音、迫力のアツェレランド、低音のフォルティシモ、第3楽章での木管との掛け合いの呼吸、すべてが自然であった。モーツァルトのハ短調でも音楽づくりに余裕を感じさせ、音の美しさとオーケストラとの協調性の良さも際立った。ガラコンサートでのプロコフィエフも好演だが、ファイナル時のインパクトのほうが強烈だった。

ジョンファン・キムはベートーヴェンの第3番ハ短調、ラフマニノフの第3番二短調を弾いた。ラフマニノフに重点をおいて準備したとみえて、断然こちらの出来がよい。リリックな歌から力感溢れる和音フレーズまで幅広い表現力をもって、曲の醍醐味を味わわせてくれた。

キム・ソンヒョンのベートーヴェンの第5番『皇帝』は、まだこの大曲を自分のものにし切れていないようだったが、第2楽章は美しい音と端正な解釈で弾けていた。モーツァルトの二短調では、ダイナミクスのグラデーションの細やかさが印象的だった。

ジョージ・ハリオノはベートーヴェンの第3番ハ短調とチャイコフスキーを披露。前者はキムとアウミラーも弾いたが、ハリオノのダイナミクス設計が最もきめ細やかだった。チャイコフスキーは力感に満ちた高速コードが鮮烈。

最後に一つ。ファイナル延べ12ステージ中、10ステージまでがカワイのピアノ「SK-EX」を選択していたことも、今回の大きな特徴だった。

